The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ケレウェにおける個人名と忌避名
Author(s)	小森, 淳子
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 1999, 9, p. 21-43
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71093
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ケレウェにおける個人名と忌避名*

小森淳子

1．はじめに

ケレウェはタンザニアの北西部、ビクトリア湖南方のウケレウェ島を中心とする地域に居住するバントゥ系の民族で、ケレウェ語（環ビクトリア語群、E24）の話者は推定１０万人である[1)]。ケレウェ人の起源は、ウガンダ北西部のニョロ王国に発すると言われ、その南方のンコレ王国と系譜を同じくする[2)]。１７世紀には Silanga 氏族による王国支配が始まり、タンザニア独立まで１７代の王を数える歴史をもつ。

現在ウケレウェ島とその回りの島々は、タンザニアの行政区の一つであるウケレウェ県 (Wilaya wa Ukerewe) をなしており、ウケレウェ県の総人口は約２０万人である。１８世紀以降ビクトリア湖の東側から同じくバントゥ系のジタ人がウケレウェに移住し始め、今ではジタ人がケレウェ人の数を上回っていると言われている。

さて筆者は、ウケレウェで97年から98年にかけて主にケレウェ語の言語調査を行った。その調査の一環として、ケレウェ人の名前とそれに対する忌避名について収集した。ケレウェ人の伝統的習慣として、嫁は舅の名前を決して口にしてはならない禁忌がある。舅の名前に言及するような場合には、いわば忌避名とでもいうべき別の名前に言い換えなければならない。

他のアフリカ地域でも見られることだが、嫁と舅の間にはお互いに避け合わなければならないという「忌避関係」がある。舅の名前を口にしてはならず、代わりに忌避名を使うことは、この「忌避関係」を言語的に体現するものだといえる。このような事例は、南アフリカのズールーやコーサにも報告されている[3)]。

ケレウェ人の名前を収集して分かったことは、男女問わず名前に何らかの意味が含まれていることである。これはアフリカの他の民族に関する先行研究[4)]でもすでに明らかになっていることだが、アフリカの固有の名前には出生時の状況や第三者へのあてつけなどのメッセージが込められていることが多い。ケレウェの名前にもそのような「意味」が数多く読みとれるのである。

名前に何らかの意味が読みとれるのは、名前の中に普通の名詞や動詞などの語彙が含まれているからである。女性はこれらの語彙に対して、女性だけが使う代替語を作りだし、その代替語から忌避名が作られている。嫁は舅の名前だけでなく、舅の名前が含みもつ語彙も代替語で言い換えなければならない。

本稿の目的は、調査で収集したケレウェ人の名前とその忌避名、さらに名前に含まれている語彙とその代替語を整理して提示することである。忌避名とそれに関連する代替語については若干の考察を加えるが、詳しくは別稿にて報告するつもりである（拙稿「言語とタブー：ケレウェ語の女性語分析」）。

2．ケレウェ人の名前

テンボやボンガンドの個人名の報告にもあるように、ケレウェの名前にもいくつかの種類がある。生まれた時に両親あるいは近い親族からつけられる伝統的な誕生名、他人や自分でつけたあだ名、キリスト教やイスラム教の宗教名、氏族（クラン）名などである。個人は普通、誕生名や宗教名など複数の名前をもつが、キリスト教が普及しているウケレウェでは、日常的にはクリスチャンネームの使用が一般的なようである[5]。

誕生名には、子供が生まれた時の状況やその当時起こった事件などにちなんでつけられる名前や、第三者に対するあてつけのメッセージをこめた名前などがある[6]。

あだ名には、自分がつけたものや他人がつけたものがあるが、あだ名の方がよく使用されていたことから、孫に誕生名として受け継がれるケースもある。

誕生名は、その時の状況やメッセージを込めたものであるとはいえ、無限のバリエーションがあるのではなく、ある程度の定形に収まっている。慣習的な命名方法があり、また同じ名前が繰り返し使われるためでもある。それからはずれるような名前はあだ名だと認識されるようであるが、誕生名をあだ名として用いる場合もあり、両者を名前の形態から明確に区別することはできない。誕生名やあだ名はケレウェ語からなるものが多いが、中には当時の事物や事件を表すスワヒリ語や他の言語が起源のものもある。

氏族名はその氏族に属する男性の名前として使われることもあるが、女性が結婚した先の婚家で呼称として使われることが多い。

名前によっては、由来がはっきり分かるものもあるが、文字通りの意味は分かってもどのような状況を表すための名前だったのか分からないものもある。時間の経過の中で、名前の意味の記憶が薄れていくからである。しかしインフォーマントのケレウェ老人による

と、ケレウェの名前は物の名前からなっていても、もともとはそれらに関連する何らかの状況を表していたはずであり、単に物の名前をつけただけの名前はないという。

それでは以下に、収集した名前を誕生名、あだ名、氏族名の順に見ていこう。

2.1 誕生名

誕生名は出生時の状況自体を表す「ちなみ名」と、命名者がおかれていた状況や心境を表す「あてこすり名」に分けられる（注6参照）。

「ちなみ名」が表す状況は大まかに、1) 妊娠時や出生時の状況、2) 出生時の家族や回りの状況、3) 歴史的な出来事、の３つに分けることができる。「あてこすり名」は、その名前の中に命名者の思いやメッセージが含まれており、その内容は死や生活の困難を嘆いたり、主に母親が回りの人々と不仲であることを嘆いたり皮肉を込めてあてこするメッセージになっている。

2.1.1 「ちなみ名」

１）妊娠時や出生時の状況にちなんだ名前

妊娠に関する名前は、母親がなかなか妊娠せずに苦労したことを表すものが多い。子供を生むことが結婚の最大の目的であり、子供を得てはじめて一人前の妻（あるいは嫁）と認められることを考えれば、不妊の悩みや苦労は深刻である。苦労が報われて子供が生まれたとき、その喜びよりもそれまでの苦労の方を名前に刻むのである。出産の様子や出生時の自然状況に言及したものなどもここにまとめた。

1. Kabunazya(M/F) <Kabunootoozya> [7)]
2. Lukanazya(M) <Lukanchuma>
   -nazya 「苦しめる」[8)]
   「なかなか妊娠せずに苦労した。」
3. Kulunalila(M) <Kulusumbizya / Saaluucha/ Kuletela>
   -nalila 「困難にあう」
   「なかなか妊娠せずに苦労した。」
4. Malibate, Malibatilo(M) <Mapandile>
   -libata 「歩く」 <ipande> 「大通り」
   「母親が妊娠薬を探して歩いた。」
5. Namiti(F) <Namibazi>
   omuti 「薬」 <omubazi>

「妊娠する薬（呪術医から得る）をのんでやっと子供ができた。」

6. Kamuhanda(M) <Kamuzelengi>

omuhanda 「道」 <omuzelengi>

「道で生まれた。あるいは、母親が妊娠薬をもらいに呪術医の所に通った。」

7. Matambo(M) <Matansyo>

-tamba 「犠牲を捧げる」

「なかなか妊娠しなかったので犠牲を捧げて祈った。」

8. Lukanga(M) <Lwanyumba>

-kanga 「驚く」 <nyumba>(Sw) 「家」[9)]

「諦めていたのに生まれて驚いた。」

9. Bugonoka(F) <Bugenecha>

-gonoka 「突然現れる」 <-genecha>

「諦めていたのに予期せず生まれた。」

10. Katuula(M) <Kagemula>

-tuula 「住む」 <-gemula>

「妊娠期間が長く、生まれるのが遅かった。」

11. Lugangizya(M) <Lunanizya>

-ganga 「遅れる」 <-nana> 「耐える、保つ」

「妊娠期間が長く、生まれるのが遅かった。

12. Lweganwa(M) <Lwenenya / Lwenanwa>

-igana 「気をつける」

「妊娠中、母親が人々から世話をしてもらった。」

13. Gabunga(M) <Gazenga>

-bunga 「他の所で子供を生む」 <-zenga>

「実家などに帰って出産した。」

14. Bagwele(M) <Kuhetuka / Kwitukumula>

-gwa 「落ちる」 <-hetuka>

「母親が暴れて落ちるように生まれた。あるいは、子供が背中やベッドから落ちた。」

15. Nakabaaga(F) <Nakachinja>

-baaga 「屠殺する」 <chinja>(Sw) 「屠殺する」

「子供が生まれてお祝いに家畜を殺した。」

（あるいは、それくらいの大きな喜びだったことを表している。）

16. Lusato(M) <Lusolongi>

17. Nansato(F) <Nasolongi>

ensato 「ニシキヘビ」 <ensolongi>

「子供が生まれる前に親がニシキヘビを見た。」（ケレウェ人にとってニシキヘビは強い禁忌であり、その災いを避けるために生まれた子供にこの名前をつける。）

18. Nansaato(F) <Nandaatwa>

ensaato 「ティラピア」 <endaatwa>

「子供が生まれたときに母親がティラピアを食べた。」[10)]

出生時の自然状況にちなんでつけられた名前には次のようなものがある。

19. Mazula(M) <Matwego>
20. Nanzula(F) <Natwego>
    enzula 「雨」 <entwego>
    「雨の時に生まれた。」
21. Kanaana(F) <Katoonanga>
    olunaana 「小雨」 <-toona> 「滴る」
    「生まれた時、小雨が降っていた。」（頻繁に子供が生まれた事を表す場合もある）
22. Magesa(M) <Matwengo>
    -gesa 「収穫する」 <-twenga>
    「収穫期に生まれた。」[11)]
23. Namwelo(M) <Namulabucha>
    omwelo 「３月」（作物が実る時期） <omulabucha>
    「３月に生まれた。」（あるいは、豊穣（子沢山になったなど）を表すこともある。）

生まれた順によってつけられる名前もある。網羅的ではないが、次のような名前が収集できた。

24. Balongo(F) <Mukwatane>
    amalongo 「双生児」 <amakwatane>
    「双子に生まれた女の子の名前」
25. Kakulu(M/F) <Kaziluke>
    -kula 「育つ」 <-ziluka>
    「双子の第一子」
26. Muhozya(M) <Munilizya>
27. Nakahozya(F) <Nakanilizya>
    「双子の次に生まれた子」
28. Ebilenjo(F) <Bizilikano>
    「男の子ばかりが続いたあとに生まれた女の子」
29. Kamalamo(M) <Kahezyamo>
    -mala 「終わる」 <-hezya>
    「末っ子」

２）出生時の家族や回りの状況にちなんだ名前

収集した名前に多かったのは、子供が生まれた時に人が死んだような状況を表す名前である。あるいは、その子の前に生まれた子供が何人も死んだような状況である。また、飢

餓や貧困などの苦難を表した名前もある。良い状況を表す名前もあるが、悪い状況を表す名前の方が多いように思える。

30. Mafwele(M) <Manegeki>
    -fwa 「死ぬ」 <-negeka>
    「生まれる前に子供が続けた死んだ。」
31. Luhega(M) <Lunenya>
    lu- （olufu 「死」の主格接頭辞） -hega 「人を押しのけて通る」
    「死が人を押しのけてやってきた。」（人が死んだ）
32. Lulegu(M) <Lunega>
    -legu 「酷いことをする」 <-nega> 「殺す」
    「死が酷いことをした。」（人がたくさん死んだ）
33. Lwitakubi(M) <Lunegakubi>
    -ita 「殺す」 kubi 「悪く」 <-nega>
    「死が人をたくさん殺した。」
34. Bituulo(M/F) <Bigale>
35. Labiina, Nabiina(F) <Nabiigale>
    ekituulo 「墓」 ekiina 「墓(溝や水の深みなどをさす)」 <ekiigale>
    「墓だらけ」（この子が生まれる前に何人も子供が死んで回りは墓だらけ。）
36. Wabiswa(F) <Wabigina>
    ekiswa 「アリ塚」（墓の形に似ている？） <ekigina>
    （何人も続けて子供が死んだ後に生まれた子につけられる。34, 35と同意。）
37. Kezilahabi(M) <Kezilahalegu>
38. Mwizalubi(M) <Mwizalulegu>
    -izila, -iza 「来る」 habi, lubi 「悪い時」 <halegu, lulegu>
    「悪い時に生まれた。」（人が死んだり飢饉などがあったりした。）
39. Mahendeka(M) <Makoonoka>
    -hendeka 「脱力する」 <-koonoka> 「衰える」
    「（死の知らせを聞いて）脱力しているような状態。」
40. Malila(M) <Magezya>
    -lila 「泣く」 <-gezya>
    「喪中」（喪中に生まれた男の子の名前。）
41. Kahabi(F) <Kanoota>
42. Muhabi(M) <Munoota>
    omuhabi 「哀れな人」 <omunoota>
    「哀れな時に生まれた。」（女の子なら喪中に生まれた。男の子は家族が貧しかった。）
43. Buzune(F) <Butwego>
    obuzune 「悲しみ」 <obutwego>
    「人が死んだ悲しみの中に生まれた。」

44. Kinaabo(M) <Kwogooja>
-naaba 「水浴する」 -oga(Sw) 「水浴する」
「喪の明けた日に生まれた。」（喪の明ける日は ekinaabo と呼ばれ水浴にいく。）
45. Wanzala(M) <Wansununuki>
46. Nanzala(F) <Nansununuki>
enzala 「飢餓」 <ensununuki>
「飢饉の時に生まれた。」
47. Musaki(M) <Mutunzi>
-saka 「飢饉の時食べ物を探しにいく」 <-tunda> (-gula 「買う」の代替語)
「飢饉の時に生まれた。」
48. Makene(M) <Tigeeta>
-kena 「貧窮している」
「家族が貧窮していた。」
49. Munale(M) <Muhabi / Munoota>
omunale 「身寄りのない人」 omuhabi 「哀れな人」 <omunoota>
「家族が貧しかった。」
50. Kanwagale(M) <Kahotoke>
-nwagala 「干からびる」
「貧しくなったとか、一族が衰退してきたなどの状況。」
51. Kasigwa(F) <Kachulelwa>
-siga 「捨てる」 <-chuleela> 「静かだ」
「親が出ていったり、あるいは早く死んだ。」
52. Naago(M) <Minswa>
-naga 「捨てる、埋葬する」 <-minsa>
「親が出ていったり、あるいは早く死んだ。」
53. Nagagwa(M) <Nagahetuka>
-gwa 「落ちる、起こる」 <-hetuka>
「子供が生まれたとき、死や事故などの悪い事件があった。」
54. Gatalya(M) <Gatasobya>
-ta （否定の接辞） -lya 「食べる」 <-sobya>
「食べられない。」（誰か病気の人がいた。）
55. Gatahwa(M) <Gataswalucha / Gataswalwa>
-taha 「汲む」 <-swalucha>
「汲まれない。」（汲む酒や水がなかった？）
56. Maengeela(M) <Maenzuuka>
57. Nakuyenga(F) <Nakuzenga>
-engeela, -enga 「うろつく、あちこち移り住む」
「新しい土地に移り住んだ。」（あるいは、親があちこち移り住んでいる。）
58. Magayane(M) <Mahatane / Manananye>
-gayana 「罵り合う」 <-hata> 「きらう」

「家族が仲が悪かった。」

59. Bahelana(M) <Bateesyanya>
-hela 「うんざりする」 <-teesya>
「家族がお互いに嫌い合っていた。」

良い状況を表す名前には次のようなものがある。

60. Muleebo(M) <Muliisya>
61. Ilelema(M) <Ilelucha>
62. Milembe(F) <Minogile>
omuleebo, ilelema, omulembe 「平和」 <-liisya> 「食べさせる」 <-noga> 「柔らかい」
「平和なときに生まれた。」
63. Chehaga(M) <Cheesobya>
-haga 「膨れる、太る」 <-sobya> 「食べる (ensindo)」
「隆盛を誇っていた。」（Sita 氏族（王族の葬儀を司る氏族）の男性名）
64. Kigobo(M) <Kihetulo>
ekigobo 「桟橋」 <ekihetulo>
「（父親か祖父が）親族から頼られる存在となった。」（他の長老が死んだなどで）
65. Namulanda(M) <Namulatucha>
-landa 「蔦がはう」 <-latucha>
「蔦が伸びるように子孫が繁栄している。」
66. Luhumbika(M) <Lusumbya> [12)]
-humbika 「何千と得る」 <-sumbya> 「集める」
「すべてを手中におさめた。」（１６代ケレウェ王の名前。隆盛をきわめた。）

３）歴史的な出来事にちなんだ名前

歴史的な出来事を記録として名前に刻むのであるが、どのような出来事や事物をどのような名前にして命名するかについては、その時の流行や特定のパターンがあったようである。収集した名前には植民地時代（独領、英領）のものが多かった。また、歴史的な出来事にちなんだ名前にはあだ名としてつけられるものもあり（次節の2.2参照）、同じ名前でも誕生名として使われる場合もあだ名としても使われる場合もあり得る。

67. Machumu(M) <Mahoso>
ichumu 「槍」 <ihoso>
「戦争の時に生まれた。」
（世界大戦のような大きな戦争ではなく、近隣の民族との戦いを表す。特に植民地時代以前には、大陸側の牧畜民からの攻撃や略奪が頻繁にあったようである。）

68. Sulusi(M) <Mbango>
「ドイツ植民地官の名前から。」(Schultz?) (<Mbango> は first name から？)
69. Kabati(M) <Kabweta / Ihweta>
「ドイツ植民地官の名前から。」
bati(Sw)「トタン」に発音が似ている。(bati の代替語は <ihweta>)
(あるいは、文字どおり「トタン」という意味のあだ名でもあり得る。)
70. Mganga(M) <Musesani>
mganga (Sw)「医者」
「ドイツ人がきて医療活動をしたことを記念した名前(1912～14年頃)。」
71. Musilikale(M) <Musilikinza>
omusilikale「兵隊」
「第一次世界大戦の時、ドイツ人が徴兵にきた。」
72. Mutanki(M) <Mutansyo>
mdachi (Sw)「ドイツ人」
「ドイツ領時代に生まれた。あるいは、ドイツ人を見た。」
73. Ngerezya(M) <Mudui / Mujeremusi>
「イギリス人」 <mdui>(Sw)「敵」 <mjeremusi>「ドイツ人」
「イギリス領時代に生まれた。あるいは、イギリス人を見た。」
74. Mutobesya(M) <Mutulaanisya>
-tobesya「税を払わせる」
「植民地時代、徴税が始まった。」
75. Musungaleeli(M) <->
-sunga「掛ける」 leeli (英語)「レール」
「英領時代、ムワンザまで鉄道が建設された(1928年完成)。」
76. Kazana(M) <Muhimilizya>
kazana (Sw)「努力する」 <-himilizya>「急がせる」
「イギリス植民官(Captain Loyd?)が「働け、働け」とはっぱをかけた(1940年代)。」
77. Mazani(M) <Mazoea>
「１６代 Luhumbika 王の時代に太鼓を持ってきて叩き方を教えたスクマ人の名前(1919～25年頃)。」 <mazoea>(Sw)「練習」
78. Mazebele(M) <Kunemwela>
「1937年に Luhumbika 王を訪ねてやってきたシニャンガのスクマ人王の名前。」
<-nemwela>「いつも人に物を頼む」(スクマ語 mazebele の意味を解釈したもの)
79. Manda(M) <Malatucha> [13]
「1906-8年頃いたインド人の名前。」

2.1.2 「あてこすり名」

ここに分類する名前の意味は、子供の出生時に親が経験したことや、命名者の回りの状

況に対する心境などをメッセージとして表したものである。必ずしも「あてこすり」が含まれているわけではないが、親のメッセージが込められた名前として分類している。「ちなみ名」と同じく、ここでも収集した名前には苦難や死を嘆くメッセージの方が喜びのメッセージより多い。

1）死や生活の困難を嘆く名前

80. Bonabibi(F) <Kebukabibi>
-bona 「見る」 <-kebuka> ebibi 「悪いこと」
「多くの悪いことを見た。」（人が死んだとか困難が続いたとか。）

81. Nagabona(M) <Ndagakebukile>

82. Ndagabwene(M) <Nagakebuka>

83. Nagabwene, Nambona(F) <Ndagakebukile>
-bona 「見る」 -bwene （-bona の完了形） -ga （「多くのこと」を表す目的接辞）
「多くのことを見た。」（人の死や災難、苦労など。）

84. Lubona(M) <Lukebuki>
lu- （olufu 「死」の目的接辞）
「死を見た。」

85. Nagona(F) <Namengi>
-gona 「全部」 <-ingi> 「多い」
「すべて。」（悪いことはすべて体験した。）

86. Bazaalaki(F) <Baminsulaki>
-zaala 「生む」 <-minsula> -ki 「何」
「何を生んだのだろう。」（続けて子供が死んだ。この子も死んでしまうかも知れないのに。）

87. Mazigo(M) <Malelelmbya>
-ziga 「だます」 <-lelembya>
「だまし。」（続けて子供が死んだ。この子も死んでしまうかも知れない。それなら生まれてきてもだまされたようなものだ。）

88. Mutesigwa(M) <Mutechuleezya>
-ta （否定の接辞 (subjunctive)） -isiga 「信頼する、頼る」
「信頼できない。」（この子も死んでしまうかも知れない。）

89. Tilubuuzya(M) <Tilusinda>
Ti- （否定の接辞） lu-(olufu 「死」の主格接辞） -buuzya 「尋ねる」 <-sinda>
「死は尋ねない。」（死は突然やってきて人を奪う。）

90. Tilumanywa(M) <Tilusombookelwa>
-manya 「知る」 <-sombookelwa> 「理解する」
「死は知られない。」（死は突然やってくる。）

91. Tiluganilwa(M) <Tilunaanilwa>
-gana 「途方に暮れる、嘆く」 <-naana>
「死に対して嘆くことはできない。」（いつまでも死を嘆いていても仕方ない。）
92. Tilusaasila(M) <Tilunaanilwa>
-saasila 「同情する」 <-naana>
「死は同情しない。」（多くの子供が死んだ。死は容赦ない。）
93. Tungalaza(M) <Ihagarazya>
-tungalaza 「気にかかる」 <-ihagarazya>
「心に気にかかることがある。」（悩みや困難がある。）

２）回りの人々と不仲であることを伝える名前

ここに挙げる名前は、主に母親が姑や他の嫁、あるいは近所の人々からよく思われていない、あるいは中傷されていることを表す名前が多い。自己卑下的ではなく、自分の窮状を回りの者にまさにあてつけているのである。

94. Bigambo(M) <Biyaago>
95. Namagambo(F) <Namayaago>
ekigambo 「言葉」 <ekiyaago>
「言葉(悪口を意味する)。」(回りから悪口を言われたり、中傷されたりしている。)
96. Balinago(M/F) <Galihezya eyoliza>
-lina 「持つ」 -ago(「言葉」を指す指示詞) <-hezya> 「終わる」 <eyoliza> 「将来」
「彼らはそれ（言葉）をもっている。」（回りがいつも悪口を言う。）
97. Bigeyo(F) <Binoomo>
-geya 「陰口をきく」 <-nooma>
「陰口」（回りの者から陰口を言われている。）
98. Biseko(M) <Bitwengo>
99. Gabaseki(M) <Gabatwengi>
-seka 「笑う」 <-twenga>
「笑い。」（回りの者から笑われている。蔑まれている。）
100. Buhatwa(M) <Bunanwa>
101. Muhate(F) <Muneja>
-hata 「嫌う」
「嫌われる。」（回りの者から嫌われている。）
102. Namunobwa(F) <Namuneja>
-noba 「いじめる」
「いじめられる。」（回りの者からいじめられている。）

103. Lugola(M) <Lugeyula>
-gola 「恥をかかせる」
「恥をかかせる、蔑む。」（回りから蔑まれて恥ずかしい思いをさせられている。）
104. Bwita(M) <Bunega>
bu-(obuwenzi(愛) や obusomi(能力) などの主語接頭辞) -ita 「殺す」 <-nega>
「（愛や能力は）人を殺す。」
（自分が愛されたり、能力があったりすることを回りの者が妬んでいる。）
105. Mwangwa(M) <Munanwa>
106. Namwangwa(F) <Namunanwa>
-anga 「拒む」
「拒まれる。」（母親が親族などに受け入れられず嫌われている。）
（女の子の場合、男の子が欲しかったのに拒まれたという意味でもつけられる。）
107. Balibonaki(F) <Balikebukaki>
-li （遠未来接辞） -bona 「見る」 <-kebuka> -ki 「何」
「彼らは何を見るだろう(今に見ていろ)。」(回りが自分を蔑んでばかにしている。)

3）結婚についてのメッセージをこめた名前

ここに挙げる名前の多くも広い意味では、2）の「回りの人々と不仲であることを伝える名前」に含めることができるが、特に夫婦の仲がいいのを回りが妬んでいることに対するあてつけが含まれているので、「結婚」というテーマでここにまとめた。夫婦間のメッセージと考えられる名前には夫から妻、あるいは妻から夫への結婚を後悔するメッセージなどがある。

108. Bulihwali(F) <Bulizunaki / Bunegwaki>
bu- (obwenzi(愛) の主格接頭辞） -hwa 「終わる」 -li 「いつ」
「愛はいつ終わるだろうか。」
（回りが夫婦の仲のいいのを妬んでいるが、この愛が終わるわけがない、私達はこのままずっと仲がいいんだよ、という気持ちを込めている。）
109. Bwizula(F) <Bwinwile>
-izula 「一杯になる、満ちている」 <-inula>
「愛が満ちている。」（回りはいろいろ妬むが、私達は愛し合っているのだ。）
110. Ndibuhaga(F) <Ndibuneja>
n- （1人称主格） -di(<-li 遠未来接辞） -ha 「与える」 -ga 「誰」
「私がこの愛を誰に与えるの。」（夫以外の人を愛するはずがない。）
111. Namutamwa(M) <Namutagalwa>
-tamwa 「後悔する」
「この結婚を後悔している。」

112. Bugwahabi(M) <Buhetukalegu>
-gwa 「落ちる」 <-hetuka> habi 「悪いところ」
「愛は悪いところに落ちた。」（結婚相手の習慣などがよくないとわかった。）

4）喜びのメッセージをこめた名前

「ちなみ名」でよい状況を表す名前が少なかったように、喜びなどのよいメッセージを表す名前も少なかった。

113. Bandola(M) <Bankebukwa>
-n(1人称目的接辞) -dola(<-lola) 「見る」 <-kebuka>
「皆が私を見ている。」（子供に恵まれて幸せな私を。）

114. Lukundwa(F) <Wabulala>
-kunda 「承諾する、好む」
「回りの者から好かれている。」

2.2 あだ名

あだ名は子供の頃の特徴や大人になってからの性格、職業などさまざまなものに由来してつけられる。調査で知り合った中に "Maneja" や "Padri" というあだ名の人たちがいた。"Maneja" は会社勤め (manager の仕事) していたが首になったことから、 "Padri" は神学校を中退して神父 (Padre) になり損なったことから、やや滑稽さをこめてそう呼ばれていた。しかし、親が幼い頃つけたあだ名や祖父母などから受け継いだあだ名は本人にもなぜそのような名前なのか由来が分からないものも多い。

ここに挙げるあだ名は、本人が長くその名前を名乗り、回りにもその名前で知られているものである。中年以上の男性の名前に多く、忌避名のあるものも多い。

誕生名と同じく、その当時の事件や事物に由来するものやメッセージが込められたものなどがある。ここでは名前自体が外来語起源のものとケレウェ語起源のものとに分けて示す。由来の明確でないものはについてはその文字通りの意味を記しておく。

1）外来語起源のもの

ここに挙げるものはほとんどがスワヒリ語である。新しい文化や文明品はスワヒリ語と共に入ってくる。

115. Sumuni(M) <Amusiini>
thumuni(Sw) 「５０セント」 <hamsini>(Sw) 「５０」
「物売りの "Thumuni! Thumuni!" という売り声から。」
116. Mabilika(M) <Eliyabalaaya>
birika(Sw) 「やかん」 <balaaya>(<Ulaya(Sw)) 「ヨーロッパ」
「やかんが入ってきた時期か？」 <Eliyabalaaya> は「ヨーロパの物」の意。
117. Maalimu(M) <Musomesha>
mwalimu(Sw) 「先生」 <msomesha>(Sw) （勉強させる人）
「本人（あるいは父親）が先生だった。」
118. Mapesa(M) <Mahela>
pesa, hela(Sw) 「お金」
「お金が流通しはじめた時期に生まれた？」
（あるいは、喉にお金が入っているような声で泣く子供のあだ名。）
119. Mashauli(M) <Mabalazya>
shauri(Sw) 「協議、助言」 baraza(Sw) 「裁判所」
「裁判所ができた時期？」（あるいは、家族が裁判にかかるようなことがあった。）
120. Magunila(M) <Mabunagu>
gunia(Sw) 「ずた袋」
「ずた袋が入ってきた時期？」（あるいは何でもがつがつ食べる人の意か？）
121. Kapongo(M) <Butamile>
kapongo(スクマ語) 「ハイエナの一種」 <butamile> 「驚き」
「 Kapongo という動物が人を襲ったという実話が伝わった。」

２）ケレウェ語起源のもの

ここに分類した名前は、あだ名であると認識されているものであるが、その名前の由来が分からないものがほとんどである。

122. Balikobanaga(M) < - >
-koba 「親戚つきあいする」 -na （相互形接辞） -ga 「誰」
「誰と親戚つきあいするのだろう」（挨拶にも来ない無礼な兄弟へのあてつけ）
123. Bizumi(M) < - >
ekizumi 「侮辱」（誕生名「あてこすり名」の2) に分類される名前と同じような意味かと思われるが、この名前はあだ名だと認識されている。）
124. Bulunge(M) <Buzaziko>
-lunga 「味付けする」 obulunge 「料理に使う牛の油」

125. Kagungulu(M) <Kazengane>
-gunngulu 「現れる」（成り上がり者？）
126. Kansola(M) <->
-n （１人称目的接辞） -sola 「選ぶ」
「私は選ばれた。」
127. Kapapo(M) <Kataba>
ipapo 「タバコ」
128. Katuuma(M) <Kagemecha>
ekituuma 「できもの、こぶ、はれもの」
129. Manya(M) <Kuleguhala>
-nya 「大便をする」 <-leguhala>
130. Muhelo(M) <Mpaka>
omuhelo 「境界」 mpaka(Sw)
131. Musaho(M) <Mfuko>
ensaho 「袋」 mfuko(Sw)

2.3 氏族名

中年以上の女性の名前を尋ねると氏族名を言われることが多い。それは女性が結婚した先の婚家では出身の氏族名で呼ばれるためである。女性を氏族名で呼ぶのは直接、名前を呼ぶぞんざいさを避けるためである。しかし、氏族名も長く使われることによって氏族名であるという意識が薄れ本人の名前のように扱われるようになる。さらに、子孫などに受け継がれ、代を重ねると氏族名であったことすら分からなくなる。

ケレウェには現在、三十余りの氏族があると言われている。各氏族はトーテムをもち、特定の氏族間には「冗談関係」も見られる。Hartwig(1971) の付録には、過去ウケレウェに移住した（あるいは通過していった）氏族 (clan) が百以上あげられている[14]。ケレウェ人と一口に言っても、その内部はさまざまな氏族の長期に渡る波状的な移住の歴史の蓄積であり、今なお流動的である。

ここに収集した氏族名は２つを除いて、現在（あるいは近い過去）の存在が確認できたものである。氏族名は基本的には氏族の名称に接頭辞 Mu– をつけて作られるが、その氏族の女性名として特別の形を持つものもある（No. 137-142）。氏族名は男性を指す場合もあるが、女性ほどは使われない。

氏族名にはもともと忌避名はないが、忌避名が女性の名前にも適用されるにつれて作られるようになった。由来のわからない忌避名も多いが、その氏族の始祖の名や故地とされ

ている地名があてられている場合があり、ここにも名前が伝承の記録として機能していることの一端がうかがえる。

132. Muhimba(F) <Mutaye>　（Mutaye: Himba 氏族の始祖と言われている）
133. Mukaya(F) <Wenseegu>　（Kaya: Kula 氏族から分かれた支氏族と言われている）
134. Mukula(F) <Wabwilo>　（Bwilo: Kula 氏族の故地と言われている）
135. Mutundu(F) <Uwachanda>　（Uwachanda: Tundu 氏族の故地と言われている）
136. Muyango(F) <Wabwela>　（Wabwela: Yango 氏族の故地と言われている（ウガンダ方面））
137. Masale(F) <Galongo>　（Masale: Gembe 氏族の女性をさす氏族名）
138. Kasaka(F) <Wabulala>　（Kasaka: Bwalumi 氏族の女性をさす氏族名）
139. Mugwe(F) <Muzeetuki>　（Mugwe: Sita 氏族の女性をさす氏族名）
140 Mungele(F) <Mumiilo / Nkole>　（Mungele: Miilo 氏族の女性をさす氏族名）
141. Musegena(F) <Wabingi>
142. Magali(F) <Engomoke>
（Segena 氏族の女性をさす氏族名には Wabingi, Magali, Wakitale などがある。）
143. Muchuma(F) <Kagondo>
144. Mugabe(F) <->
145. Muhindi(F) <Mukumilizi>
146. Mulanzi(F) <Mugeleezi>
147. Muluhu(F) <Waliyongu>
148. Musingo(F) <Weloba>
149. Musonge(F) <Baheta>
150. Musoosi(F) <->
151. Mutimba(F) <Welango / Kaboni>
152. Muzubwa(F) <Mulegeya>
153. Buyanza(M) / Muyanza(F) <Busalikwa/Musalikwa>
154. Gembe(M) <Lusyanuke>
155. Mukwaya(F) <Buzita>　（Musoma 方面の別民族 Kwaya か？）
156. Muhaya(F) <Muchungi>　（Bukoba 方面の別民族 Haya か？）

3．忌避名について

忌避名については、語彙調査を進めていく中で偶然その存在を知り、名前と共に聞き集めたのだが、まだ調査は不完全で、特にその運用面での実態については不明な点が多い。ここではこれまでの調査で分かったことをいくつか挙げ、今後の調査が必要な点も含めて議論する。

3.1　タブーと忌避名（"ensindo"）

忌避名はもともとケレウェの女性が夫の父、つまり舅の名前を発声することを避け、別の語に置き換えて言うために作られたものである。女性は結婚すると、夫側での結婚式の儀式が続く数日間に、婚家の姑や女きょうだいから、例えば「お義父さんは Mafwele という名前だけれど Manegeki と言わなければならないのですよ。」などと教えられる（他にも舅の兄弟や男の親族の名前と忌避名を教えられるそうだが、どの人までが義務的であるのかはわからない）。

この忌避名の習慣は、明らかに嫁と舅の強い「忌避関係」に由来する。嫁と舅だけでなく、夫と妻の母（つまり姑）との間にも同じように強い「忌避関係」が存在する。この関係にある両者はお互いに顔を見ることや言葉を交わすことを極力避けなければならないが、特に嫁の舅に接する時の態度は、ひざまづき方から物の受け渡しまで細かな作法が決められている。また、夫と姑の間には忌避名を用いる習慣は見られない。

忌避関係を一種のタブー関係ととらえると、忌避名もタブー語の一種ととらえることができる。タブー語とはその言葉を発声することによって強い恐怖や畏怖、あるいは嫌悪や羞恥の感情を引き起こす言葉で、「禁忌語」や「忌み言葉」とも呼ばれる[15]。また、タブーとなる語を避けるために使われる代替語の方を指してタブー語と呼ぶ場合があり、忌避名をタブー語というのはこの例になる[16]。

神や王の名を明かし発声することはすなわち神や王に触れることであり、それゆえ邪悪な力から守るためその名前を秘匿する（フレイザー (1951)pp. 212-221）。触れてはならないものには名前さえ触れてはならない、タブーとなるものはそれを指す言葉さえタブーになる、ということを考えれば、舅の名前の忌避という現象も同じように理解することができるであろう。

さらに言語におけるタブーには、タブーとなる語を喚起させるような語さえも発声を避けようとする傾向がある。日本語で「四」を「し」ではなく「よん」と呼ぶことや、英語で「ウサギ」を指す語が古語の "coney" から "rabbit" に代わった理由などもこれに関係する[17]。

同様に、嫁は舅の名前を忌避するばかりでなく、その名前に含まれている語や音韻的に類似した語までも避ける。例えば、舅の Mafwele という名前を避けて忌避名の Manegeki で言い換えるのみならず、その名前が含み持つ動詞 -fwa 「死ぬ」という語も避け -negeka という代替語に置き換えて言うのである。また、 olufwo 「内臓」などの語も -fwo の部分

が -fwa に類似していることからこれを避け、 olunegeki という代替語を用いる。ケレウェ語ではこのように別の語に置き換えることを "-sinda" と言い、忌避名と代替語をどちらも "ensindo" と言う。 ensindo は忌避関係を言語的に表現する現象ととらえることができ、タブーとタブー語に関する現象一般の中に位置づけることができる。

3. 2　"ensindo" の起源

問題は、 ensindo がどのように作られ、どのように広まり、またどの程度認知され、使われているかということである。これらの問題はこれから解明していくべき問題であるが、一つめの問題について考える手がかりを見てみよう。

Mafwele(No. 30) や Mazula(No. 19) などのようにケレウェ人によくある名前で、その意味も、含まれている語彙もよく知られているものであれば ensindo もよく知られていて、誰に聞いても同じ ensindo が得られる。しかし、例えば No. 1と No. 2のように、同じ動詞 -nazya を含みもつ名前でありながら ensindo が異なる場合がある。 No. 3や No. 12, 14の場合も同様に、同じ名前に対して、答える人ごとに忌避名が異なっている。

このことから考えられるのは、もともと ensindo は一つの家族など非常に狭い範囲で作られたものではないかということである。一般的な名前やよく使われる単語の ensindo は聞き伝えられて広まり、統合されるなどしてさらに広まり、一般に認知されていったのではないだろうか。

また ensindo は、女性が新たに作り出した語というよりは、もともとあるケレウェ語を用いて発展させていったのではないかと考えられる。似た意味の語に置き換えたり、連想から作り出したような ensindo の例が見られるからである。

例えば、 No. 11の名前に含まれる動詞 -ganga 「遅れる」に対して ensindo は -nana 「耐える、保つ」というケレウェ語をあてている（名前はそれぞれの動詞を派生させた形である）。 No. 21の名前では olunaana 「小雨」に対して動詞 -toona 「滴る」を用いて ensindo 作っていることが分かる。このように ensindo は、独自に作られた語彙というより、ケレウェ語の中の別の語彙を用いて作られたものだと考えられる。これらの例のように普通のケレウェ語として意味が理解できる ensindo の例は少ないが、意味が理解できない ensindo の中には、古いケレウェ語の形を留めたものもあるかも知れない。

ensindo が似た意味の語の置き換えや連想から作られていることは、外来語源の名前やあだ名を見るとさらによく分かる。 No. 76の Kazana はスワヒリ語起源の名前だが、その

名前の意図するところをケレウェ語に言い換えて ensindo にしている。 No. 73の Ngerezya 「イギリス人」に対する mdui 「敵」や mjeremusi 「ドイツ人」という ensindo は関連する語に言い換えたものである。 No. 77も太鼓の叩き方を教えたことからの連想で「練習」という（しかもスワヒリ語の）単語を用いている。スワヒリ語源のあだ名 No. 115～9を見ると ensindo も関連するスワヒリ語で作られている。これらの ensindo がどれほど普及し認知されているものかは分からないが、このように似た意味の語や連想から作られている ensindo を見ると、少なくともその作り方の発想は見て取ることができる。

3. 3 "ensindo" の拡張

3. 1で見たように、 ensindo はもともと舅の名前を忌避し、代替語に置き換えることからできたものであるが、今では女性が使う丁寧語としての機能も担っている。つまり、自分の舅の名前に関する ensindo だけでなく、他の ensindo も場合に応じて丁寧語として使うのである。このことから ensindo を、女性が使う「女性語」ととらえ直すことも可能である。そうすることによって、世界の多くの言語に見られる男性と女性の言葉の違い－言語の性差－という問題とも関連してとらえることができると考える。

また、 ensindo は本来の機能から丁寧語としての機能を付加していく中で、その内部で派生的に語彙を増やしていき、また、女性の名前やあだ名などに対しても ensindo が作られていったと考えられる。

さらに興味深いのは、近隣の民族のジタ人やカラ人の名前にも ensindo があることである。ジタやカラにも嫁と舅の「忌避関係」はあるが、ケレウェ人ほどその作法にうるさくなく、忌避名の習慣ももともとなかった。民族間の婚姻なども含めた長い共存の結果、この習慣が浸透していったのである。おもしろいのは、 ensindo として使われる語彙はジタやカラ独自のものでなく、ケレウェのものを用いていることである。たとえば No. 95と同じ意味でつけられるジタ人女性の名前に Namusango というのがある。これはジタ語の omusango 「言葉」から作られた名前だが、 ensindo は <Namayaago> で、ケレウェ語と同じものを用いている。

ensindo は基本的に女性だけが使う「女性語」であり男性は使わないが、よく使う単語の ensido は男性にも知られており、さらに ensindo が普通の単語に取って代わる場合さえある。たとえば、男性名に Mwandu<Kitunganwa> という名前があるが、これは「家畜」という意味の omwandu からなっている。この語の ensindo は <ekitunganwa> であるが、今で

はekitunganwaの方が「家畜」を指す一般的な語彙となっていて、もともとのomwanduは使われず、今では名前の中にだけその形を留めている。

しかし、一般によく知られた語彙を除けばensindoの知識は個人的な偏りが大きく、「女性語」としてどの程度普及しているかは分からない。また「女性語」を誰に対してどのような場面で使うかということについては不明であり、今後の調査課題である。

４．まとめ

以上、ケレウェ人の名前とその忌避名、さらに忌避名を含むensindoに関する現象について見てきた。ここでは、約150の個人名をあげて分類し、その意味について述べたが、まだ８０余りの名前がフィールドノートに残ったままである。その中には明らかにジタ人やカラ人の名前と見られるものもあり、それらは除外した。その他の名前は、ケレウェ人のものではあるが誕生名なのかあだ名なのか分からないもの、また文字通りの意味は分かるが、どういう由来で名前になったのかが分からないものである。個人の「名前」にとって、意味を担うメッセンジャーとしての機能より、その個人を指示するという機能の方が重要であることを考えれば、由来の分からない名前が多くあるのも当然であろう。

本稿ではケレウェ人の名前の意味に注目してみたが、現在のケレウェの人々にとって、これらの名前のもつ意味が、どれほどのリアリティーをもって感じられるものかは分からない。ただ、こうして名前を分析することによって、ケレウェの伝統的な命名方法が明らかになり、他のアフリカ地域にも共通する普遍的な特徴を確認できたといえる。

また、命名すること自体は人間の文化の普遍的な特徴であるとしても、名前の種類や命名の方法がいかに文化によって異なるかということが実感をもって理解できたように思う。日本人に馴染み深い、希望や願いが込められた名前とはおおよそ異なる名前である。そこには、歴史やメッセージを刻むという命名法の違いもさることながら、名前に刻まれたウケレウェの過去の生活のいかに困難が多かったかという事実もまた、まざまざと映し出されているのである。

いまだに乳児死亡率は高く、また調査の滞在中にもどれだけ多くの人の死にあったか分からない。隣人を妬み、妬まれ、それでも表面的には友好的につきあう。親戚づきあいが疎遠にならないように頻繁に訪ね合う。常に人間関係に心を砕き、気をもむ。そんな彼らの日常生活が名前の分析を通して、より一層鮮明に感じられるようになった。

木村(1996)は、死を意味するような「不吉な名前」には「死」が子供に注意をむけな

いようにしようとする「逆転の発想」が働いていると述べている。確かに、田中(1996)が挙げているモンゴル人の名前のように、「これじゃない」、「あれじゃない」、「誰でもない」などの名前には、魔物に語りかけて退散ねがうための名前だという解釈も可能であろう。しかし、ケレウェ人の名前とその命名法を見るとき、その名前には「死」を欺こうとする発想の入る余地のないほど、彼らを取り巻く圧倒的な現実がそこに映し出されているように思えてならない。

注

* 本研究は、文部省科学研究費補助金による国際学術研究「東アフリカにおける地域共通語に基づく文化圏生成とエスニシティの構造」（課題番号08041015、研究代表：宮本正興大阪外大教授）によって行った調査に基づいている。

1) タンザニアでは民族別の人口調査を行っていないのでケレウェ人の総人口は分からないが、ケレウェ語の話者数はSIL発行の*Ethnologue*(13版1996年)による。ちなみに後述のジタ人について見ると、ジタ語の話者数は約２０万人とある。
2) Hartwig(1971)。
3) フレイザー(1951)、第２２章。
4) 梶(1985)、川田(1998)、木村(1996)。
5) 個人がどのような名前をいくつくらい所有しているのか、またどのような名前を自称するのか、誰にどのように呼ばれるかなどの実際の名前の使用に関しては未調査である。この点に関して、個人がもつ名前の数と自称、他称の調査を行った木村(1996)の報告は興味深い。
6) 川田(1998)は前者を「ちなみ名」、後者を「あてこすり名」と呼んでいる。梶(1985)は前者が「通時的メッセージ」、後者が「共時的メッセージ」を伝える機能があることを述べている（ただし、祖父母の名前を受け継ぐこともあるので、その場合はそれらの意味が子供の誕生時に込められたものとは限らない）。本稿でも便宜的に「ちなみ名」と「あてこすり名」を分類に用いる。
7) 名前の右の(　)内のMは男性名、Fは女性名、M/Fはどちらの名前でもあり得ることを示す。忌避名は＜　＞に入れて示す。＜ - ＞はその名前に対して忌避名が得られなかったか、もともとない場合である（あだ名や氏族名には本来、忌避名はなかった）。また、同じ名前でも異なる忌避名のある場合がある。複数の忌避名が得られた名前については、＜　＞内に / で区切って併記する。同意の名前は並記、あるいは二段続きで記し、名前の下には名前に含まれている語彙をあげ、その語彙の意味を記す。その語彙に対応する代替語が明白である場合は同じく＜　＞で示す。代替語の意味が分かる場合に

はその意味も付す。

8) ケレウェ語の発音はほぼアルファベット通りである。母音の長短の区別は母音の数で表される。声調は「高」、「低」、「下降」と区別されるが、本稿では声調符号は省略する。動詞や接辞は - （ハイフン）をつけて示す。また、名前についている接頭辞（Ka-, Ma-, Na-, Bu-, Lu-, . . . など）には、特定の意味をになっているものもあれば、単に名詞化接辞として機能しているものもある。接頭辞や動詞の語形変化については、名前の意味を解釈する上で必要なもののみとり上げて示す。

9) (Sw) はスワヒリ語であることを示す。No. 8の忌避名は連想ゲームのようにできている。olukanga「まだ藁を葺いていない屋根」という意味の同音異義語がある。そこで「屋根」から「家」が連想され、スワヒリ語の nyumba を忌避名に用いたのである。

10) 子供が生まれた時に母親が食べた物の名前をつけた名前はジタ人に多く、ケレウェ人にはあまり見られない。「ティラピア」を意味する名前は女の子にだけあり、男の子の Masaato<Malaatwa> という名前はジタ人の名前である（ジタ人の女の子な Nyansaato と発音される）。ちなみにティラピアはビクトリア湖でとれる白身の淡水魚で大変好まれている。

11) 「収穫期」と同じように「農耕期」という名前もある。男性名 Malima、女性名 Welima である。しかし、これらの名前はもともとジタ人の名前であって、ケレウェ人の名前ではないと言われている。ただし、ジタ人にも忌避名の習慣が浸透しているので、それぞれ <Mazibuhyo>、<Wezibuhya> という忌避名がある。

12) Hartwig(1971) の付録には歴代１７人の王の名前が系図の形で挙げられている。王の名前は No. 66のようにその隆盛を誇るものや１５代王のように「王」という名前から、No. 52のような「ちなみ名」までさまざまである。歴代王の名前は現在でも使われていて同名の男性に何人か出会った。その中でも王家筋の Silanga 氏族の男性は何らかのつながりがあって命名されたのかも知れない。以下に、Hartwig(1971) に挙げられている王の名と同名の男性から得た忌避名を記し、分かるものについては意味も記す（表記は原文ママ。ケレウェ語では /r/ と /l/ の音韻的対立はない）。

1. Katobaha <Katatinwa>
2. Kaseza <Kakwata> （omuseeza「男」<omukwata>）
3. Katobaha II
4. Mihigo <Musegena> （cf: Silanga 氏族は Segena 氏族の分派と言われている）
5. Kahana <Kachungi> （-hana「教え導く」）
6. Lutana Mumanza
7. Nago <Minswa> (No. 52の名前に同じ)
8. Mihigo II
9. Katobaha III
10. Golita <Gomocha>
11. Ruhinda <Lukumilizi>
12. Ibanda <Ilegezyo> (ibanda「小屋」 <ilegezyo> は ibanga「山」の代替語。)
13. Machunda <Maluutano> (-chunda「搾った牛乳を容器に入れて振る」)
14. Rukonge <Lwamanzi>

15. Mukama <Mtemi> （omukama「王」 mtemi(Sw)「王、首長」）
16. Ruhumbika <Lusumbya> (No. 66参照)
17. Lukumbuzya （1981年、タンザニア大使としてカナダで客死）

13) 忌避名 <Malatucha> は "-landa" （蔦がはう）の代替語 <-latucha> から作られている。Manda が -landa に音韻的に似ていることから援用したものである。

14) 中には 'Sandasya(Sandawe)' や 'Kangara(Tatoga)' といった名前もリストに上がっている。これらは明らかに狩猟採集民や牧畜民などの別民族であり、ケレウェの氏族とは言えない。ただ、ウケレウェにはこれらの民族も含めた多くの氏族、民族が移動してきては滞在し、また移住していくという民族移動がみられ、その離合集散の中に民族としてのケレウェの生成があったと考えられる。

15) 嫌悪や羞恥を引き起こすタブー語には性（性行為や生殖器官など）や排泄に関わる言葉があり、特に性に関するタブー語はマスメディアなどでも神経質に避けているのが見られる。タブーとなる言葉やその度合いは文化によって異なり、欧米ではキリスト教に関する言葉もタブー語になる（トラッドギル (1975)p. 21-5）。ただし、キリスト教に関するタブー語は嫌悪や羞恥ではなく、畏怖を喚起するタブー語であるといえる。

16) 例えば、猟師が使う「山言葉」で「熊」を「くろげ」という場合、代替語である「くろげ」を指してタブー語という。

17) 蛇足ながら「し」は「死」を、"coney" は「女性性器」を表す単語を連想させるからである。

参考文献

井出祥子編 1997. 『女性語の世界』、明治書院.

梶 茂樹 1985. 「テンボ族における個人名－言語人類学的考察－」、『季刊人類学』 vol. 16-1、 pp. 47-88、講談社.

川田順造 1998. 『聲』、ちくま学芸文庫、筑摩書房.

木村大治 1996. 「ボンガンドにおける個人名」、『アジア・アフリカ言語文化研究』 No. 52、 pp. 57-79、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

小馬 徹 1997. 「命名と禁忌」、『月刊言語』 vol. 26, No. 4、 pp. 36-41、大修館.

田中克彦 1996. 『名前と人間』、岩波新書.

出口 顕 1995. 『名前のアルケオロジー』、紀伊国屋書店.

豊田国夫 1988. 『名前の禁忌習俗』、講談社学術文庫.

トラッドギル, P.（土田滋訳）1975. 『言語と社会』、岩波新書.

フレイザー, J.（永橋卓介訳）1951. 『金枝篇』（二）、岩波文庫.

Hartwig, G. W. 1971. *A cultural history of the Kerebe of Tanzania to 1895*, Ph D, Indiana University, UMI.

Odden, D. 1998. Kikerewe-English Dictionary , ms.